

近代京都の陶芸技術にみる古典へのまなざし

—— 革新と復古の間で京焼陶工が目指したもの ——

森 下 愛 子

1. はじめに

日本には、無形の「わざ」に関して、重要無形文化財として認定する制度がある。認定対象となる伝統的な技法、つまり「わざ」は、発達した時代や、場所、原材料、製作工程等、そして継承者の存在により、その姿は多様である。ちなみに現在の陶芸技術においては、「色絵磁器」「柿右衛門〔濁手〕」「色鍋島」「鉄釉陶器」「志野」「備前焼」「萩焼」「青磁」「白磁」「彩釉陶器」「釉裏金彩」「無名異焼」「小鹿田焼」の13件が認定されている（2009（平成21）年3月1日現在）。

現在の重要無形文化財に関する制度は、第2次世界大戦後に誕生した。大戦により崩壊の危機に瀕した伝統工芸の「わざ」の復興は、1952（昭和27）年に「助成の措置を講ずべき無形文化財」の選定によってはじまる。その後、1950（昭和25）年に制定・公布された「文化財保護法」、そして1954（昭和29）年の「文化財保護法」改正によって現在の制度となる。認定された重要無形文化財保持者、また保持団体は認定された「わざ」を後世に残すために、文書による技術記録や工程見本、完成品を文化財保護委員会に提出するとともに、後継者の育成を行う。

その前身といえる制度として、帝室技芸員の制度を挙げたい。この制度は、皇室（帝室）による「わざ」をもつ美術工芸家の保護と制作の奨励を目的として、1890（明治23）年に設けられた。「わざ」そのものを保護する制度ではないが、国家が製陶家にスポットを当てた初めての制度という点において注目すべき制度であると思う。明治維新以後、欧米諸国から次々と新しい美術工芸やその「わざ」や原料が入り、江戸時代までに形成された伝統的な美術工芸の衰退と、その作り手の経済的困窮が顕著になっていく。これに対して、欧米諸国に通用する作品制作が必須になり、工芸技術の保護と制作奨励を図るために、西欧のアカデミーにならって技芸員の制度が制定された、と言われる。その人選にあたっては、宮内大臣の任命による選択委員が、美術工芸家の中から、技術・人格の両面において優れたものを推薦し、帝国博物館総長が召集する会議で決定された。帝室技芸員は宮内省から特に制作を命じられることもあり、帝国博物館総長の諮問に応じるなどの義務が課せられていた。当時、帝室技芸員は、皇室の保護と国家的な名誉を受けた美術家・工芸家であり、最高の名誉とされた。最後の選択会議が行われた1944（昭和19）年までに、美術工芸の各部門から合計79名が任命され⁽¹⁾、陶芸分野においては、以下の5名が任命された。

陶工	三代清風与平（1851～1914）	……1893（明治 26）年 9 月 25 日任命
陶業	初代宮川香山（1842～1916）	……1896（明治 29）年 6 月 30 日任命
陶工	初代伊東陶山（1846～1920）	……1917（大正 6）年 6 月 11 日任命
陶工	初代諏訪蘇山（1852～1922）	……1917（大正 6）年 6 月 11 日任命
工芸	板谷波山（1872～1963）	……1934（昭和 9）年 12 月任命

この 5 名のうち、板谷波山を除く他の 4 名は、全て江戸時代から続く京焼の製陶家の子孫や弟子である。三代清風与平、初代宮川香山に関しては、近年注目が高まりつつあるものの、初代伊東陶山、初代諏訪蘇山に関しては、未だその功績は紹介されることが少ない。その原因として挙げられるのは、近世と現代とを繋ぐ近代のやきものの総体的な評価の低さにあると考えられる。その理由として、近代のやきものは、第一に産業的・工業的な生産体系の中で製作されてきた職人技という要素が強いという視点、第二に「技巧主義」であるという視点、そして第三に、技巧的な明治期のやきものは作品そのものではなく、その製作工程において、個人作家による創造ではなく、分業による職人的な仕事である、という現代陶芸的な視点から評価を受けてきたことが主な原因として挙げられる。

今年度は、明治時代の京焼の製陶家が蒐集した古陶磁の調査と、明治時代中期から後期に刊行された京都の陶芸技術に関する文献の調査、研究を行った。明治時代は、万国博覧会をはじめとする博覧会を軸に語られることが多い。国内向けから国外輸出向けの陶磁器生産への変換が求められ、工芸分野に関しても、作り手側の体制に急激な転換が求められた時代である。このような過渡期に、図案研究や釉薬技法の開発へといち早く方向性を転換させた京都において、製陶家たちは江戸時代より続く伝統的な「わざ」や意匠をどのように学び、継承し、創意工夫を行ったのか。このことをクローズアップするため、近代京都の製陶家が自らの作品の参考として蒐集した日本の古陶磁について紹介したい。

2. 近代の京焼における古陶磁研究

2-1 文献にみる京焼の動向

明治時代から大正時代に京都で活躍した初代伊東陶山の作品に、上絵雲錦手鉢（図版 1）がある。この作品の源泉は尾形乾山の作品にあると思われるが、「雲錦手」という桜と紅葉を一つの画面に立体的に表現した作風は、幕末期に活躍した京焼の製陶家、二代高橋道八（仁阿弥道八）の作品、色絵雲錦鉢（図版 2）に手本があると思われる。雲錦手の意匠は当時非常に人気を博したことが、伝世する作品と同時代の文献資料から知ることができる。日本のやきものを考える時、古陶磁への「憧憬」そして「写す」または「模倣する」という行為がその発展において重要な要素となる。殊に本論文で考察する京焼は、当時の流行、嗜好を即座に取り入れる点に特性があり、中国や日本の古陶磁を手に入れたと考えた需要者側の意図に作り手側は応え、その製陶技術や釉薬の調合は各家の秘伝であった。それに対し明治時代は、窯業を日本の一大輸出産業として拡大させたいという政府の意向のもと、欧米諸国に受け入れられる「日本的な（または東洋的な）」陶磁器を作ることが求められた時代だった。そのような状況

下で、京都の製陶家や陶磁器研究者は、他の地域に比べいち早く積極的に国内外の古陶磁器を手本とした製造方法等の改良や、釉薬の化学的な研究を行っていく。

このような京焼における古陶磁研究の傾向は、江戸幕末期に活躍した二代高橋道八（仁阿弥道八）や永楽保全・和全、清水六兵衛や眞清水蔵六といった製陶家にみられるものであり、その作品には多く古陶磁写しが存在する。彼らは近世から近代へと京焼の伝統をつなぐ懸け橋的存在であったといえる。その弟子筋にあたる明治時代の製陶家のなかで、見事に新たな製陶技術や釉薬と伝統的なわざを融和させ、欧米をも驚嘆させる作品を制作した製陶家が、帝室技芸員に任命された三代清風与平であり、初代宮川香山、初代伊東陶山、初代諏訪蘇山であった。その中でも現代の陶芸家的な「個」としての要素が強い三代清風与平に対し、初代伊東陶山は京焼界の技術改良に尽力した人物として、その貢献度の高さが特に評価された人物であったのかもしれない。

明治維新後、日本では政府が提唱した富国强兵・殖産興業のスローガンのもとに、陶磁器が主要な輸出品のひとつとなる。そして輸出用に生産された日本の陶磁器は欧米で一大ブームを巻き起こし、日本の一大輸出産業となる。それに伴い、日本的でありながらも、より斬新で精巧な陶磁器が求められ、技術や釉薬を研究することの必要性が説かれた。その中でも京都はその意識が高く、公的な陶磁器研究の先駆けといえる地域である。

明治時代初期に活躍した京焼の製陶家としては、永楽善五郎、幹山傳七、四代高橋道八、二代清風与平、眞清水蔵六、清水六兵衛、錦光山宗兵衛などが挙げられる。いずれも江戸時代から続く製陶家であり、1873（明治6）年にそれぞれ京都府より「勸業場用掛申付」に任命された。勸業場は、陶器や織物などの手工業品、農作物などの製作、生産における改良、府内経済流通の円滑化を目的に設立された。また、同年オーストリアのウィーンで万国博覧会が開催された^②。「博覧会事務局指揮スル所ノ物品調達」とのことから京都府より、永楽善五郎、四代高橋道八、二代清風与平、眞清水蔵六、清水六兵衛、清水七兵衛、和氣平吉等の五条坂の製陶家と、丹山青海、帶山與兵衛、岩倉山吉兵衛の栗田の製陶家が依頼を受ける。1875（明治8）年には、四代高橋道八が京都府より西洋陶磁器製造法習得のため、東京土瓦試験場に赴き、石膏型を用いた磁器製作の技法を京焼に導入するなど、技術面での革新も次々に起こった。

上記のウィーン万国博覧会に参加したことにより、明治政府は殖産興業・富国强兵のためには博覧会の存在が欠かせぬものであることを認識する。この認識によって1877（明治10）年、日本初の本格的な産業博覧会が開催された。内国勸業博覧会と称し、開催されたこの博覧会は、殖産興業のためには国内における博覧会の存在が重要な位置を占めること、全国から伝統産業といえるモノを蒐集しそれを分類・展示することで、国民に刺激を与え国内の産業に対し意識をもつことを誘発した。国民の教化を目的としたこの博覧会の発展と共に、日本における博物館の前身ともいえる施設が誕生していく。

またこの国内の博覧会に関する一連の動きが、日本における文化の歴史的な定義付けを形成する動きへとつながる。1878（明治11）年のパリ万国博覧会に日本が参加するにあたり、日本の工芸史を国内にも知らせ、日本の良さを工人等に自覚させようとの意図から博物局から刊行されたのが、『工芸史料』であった。監修は、パリ万国博覧会や内国勸業博覧会などの仕事に従事した黒川真頼（1829～

1906) による。この『工芸志料』は、日本全国のやきものを紹介した画期的な書物であり、その後の書物に多く引用された。この資料から京焼に対する評価を参照したい。

【資料1】「京焼」『工芸志料』 明治11(1878)年⁽³⁾

仁清の派分かれて二となり(中略)其の一派は清水の磁器是なり。是より先、音羽屋九郎兵衛という者なり、清閑寺に住す。宝暦年間清水に移り、旧に依りて磁器を製す。[亦清水焼という]

文化年間に至りて高橋道八、和氣亀亭、水越与兵衛等、肥前有田の法に倣い、始めて青華磁器を製す。多くは指頭を以て造り、模型を用いず、画法も亦甚だ巧なり

爾来良工輩出して磁器を専らとせる者は、則ち幹山伝七、丸屋佐兵衛、亀屋文平著名のものなり。瓷器を兼て製する者は、第二世高橋道八、第二世和氣亀亭、清水七兵衛、清水六兵衛、清風与兵衛、真清水蔵六(今日はましみずと呼んでいる)等著名のものなり。

* 文中傍線は執筆者による

江戸時代以降、京都地域で生産された陶磁器を京焼と称するようになる。京焼は、一種のブランドネーム的なものとして定着した。この京焼についての項目をみると、『工芸志料』では、仁清を源流として、二派(栗田焼と清水焼)に分かれたこと、文化年間に高橋道八らが京都において初めて青華磁器を製したことが取り上げられる。この高橋道八らによる青華磁器、つまり染付磁器の制作は、明治時代の京焼文献に非常に多くみられ、磁器の生産に関して、佐賀県有田周辺地域に後れをとっていた京焼にとって、大きな功績だったと想像される。以下、当時の文献から初代伊東陶山が手本とし、当時の京焼の項に多く登場する高橋道八家に関する文章を紹介したい。当時の文章から、同時代の評価対象が何であったのか、ということが浮かび上がる。

1886(明治19)年に農商務省によって編纂された『府県陶器沿革陶工伝統誌』、また1891(明治24)年の『大日本産業事蹟』の中で、高橋道八家は単独の項目をたてられ、功績が称えられる。

【資料2】「第二 京都府」『府県陶器沿革陶工伝統誌』1886(明治19)年

高橋道八 曾祖父空中ハ伊勢亀山藩士高橋八郎太夫ノ次男ニシテ周平光重ト云寶暦中京都栗田ニ寓シ陶業ヲ開キ兼テ竹木ノ彫刻ヲ善クシ自カラ號シテ松風亭空中ト云フ元文五年ニ生レ文化元年四月廿六日卒ス歳六十五是ヲ初代トス

二代道八文化八年五條阪ニ移リ和漢ノ古陶器ヲ摸シ又捏像ヲ製ス^① 文政九年仁和寺宮ヨリ法橋及仁阿ノ字ヲ賜フ 因テ仁阿彌ト號ス文政ノ末三代道八ト謀リ白磁青華磁器ヲ創製シ名聲遠邇ニ播ス^② 天保十三年伏見桃山ニ遁レ別窯ヲ築キ桃山焼ヲ製ス此器タル各色ノ彩料ヲ用井テ釉上釉下ニ浅深ノボカシ及ヒ抜畫ヲ出タス當時其比類ナキヲ以テ世ノ珍賞スル所トナル 三代道八亦家聲ヲ墜サス

* 文中傍線、記号表記は執筆者による

【資料3】「山城五条陶工高橋道八の伝」『大日本産業事蹟』1891（明治24）年

京都の陶工高橋道八の曾祖父空中は、伊勢亀山藩士高橋八郎太夫の次男にして周平光重と云う。宝暦中京都栗田に寓し、陶業を陶業を開き兼て竹木の彫刻を善くし、自ら号して松風亭空中と云う。元文五年に生れ、文化元年四月二十六日卒す。歳六十五。これを初代とす。二代道八は文化八年五条坂に移り和漢の古陶磁を模し、また捏像を製す^①。文政九年仁和寺宮より法橋および仁阿の字を賜う。よりて仁阿弥と号す。文政の末、三代道八と謀り、白磁、青華磁器を創製し、名声遠邇に伝う^②。

* 文中傍線、記号表記は執筆者による

【資料2】と【資料3】はほとんど同じ内容であり、【資料1】の記述より、評価対象が増えたことがわかる。①和漢の古陶器を模す、という点と②白磁、青華磁器を創製、という点である。この2点は、当時の京焼界の状況に呼応した評価だったのではないだろうか。

当時の京焼界では、明治初期には、万国博覧会に出品するために、国内向けから国外輸出向けの陶磁器生産への変換が求められ、製陶家をはじめ、作り手側の体制にも急激な転換が求められた。その後、綿密な技巧による「SATSUMA」（薩摩焼）のような豪華絢爛な輸出陶磁器が海外で評価され、絶頂期を迎えるも、アール・ヌーヴォーの隆盛と共に海外からの評価が暴落する。その傾向は1893（明治26）年にシカゴで開催されたシカゴ・コロンプス世界博覧会において、より顕著にあらわれた⁽⁴⁾。この年、明治の京焼界において古陶磁研究の先駆者ともいえる三代清風与平と初代宮川香山が帝室技芸員に任命された。このことは、彼らが巧みに古陶磁の素地、釉薬や器形を研究し取り入れつつも、個性的で優れた作品を創製した点において、国内外で評価された結果と考えられる。

しかし、1895（明治28）年に京都の岡崎で開催された内国勸業博覧会で京焼が不振に終わる。その背景には明治前半期の京焼をリードした幹山伝七、永楽和全、四代高橋道八などが相次いで没したことも一因とされるが、日本の窯業界をリードしていた京焼界において不振が表面化した出来事だった。

そのような状況を打開するため、初代伊東陶山を始め京焼界の製陶家や研究者が集まり、新境地への可能性を古陶磁研究と西洋技術の導入による釉薬技法の開発に希望を託し、1896（明治29）年に京都市陶磁器試験所が設立される。この京都市陶磁器試験所に現存する参考品と初代伊東陶山が個人として蒐集した古陶磁について次項で紹介したい。

2-2 京焼製陶家の古典学習

初代伊東陶山（1846～1920）は、その伝記によると⁽⁵⁾、12歳の時、円山派の画家、小泉東岳に絵を学び、18歳の頃、五条坂の亀屋旭亭に入門、次いで三代高橋道八、幹山伝七、九代帯山与兵衛、一文字屋忠兵衛ら当時第一線で活躍していた製陶家の指導を受けた。[参考資料1]は1887（明治20）年に開催された京都新古美術展覧会において、高橋道八や清水六兵衛らとともに初代伊東陶山も絵付けの実演を行う様子が描かれる。1896（明治29）年には京都陶磁器同業組合を設立し、取締役、組合頭取を務め、1896（明治29）年の京都市陶磁器試験所設立に製陶家の立場から尽力した。その後も子弟に化学

的製法を伝習させるため、試験所内に伝習所の設立を画策し、1898（明治 31）年にはその規則を定めた。この京都市陶磁器試験所⁽⁶⁾（1903（明治 36）年に京都市陶磁器試験場と改称）は、様々な化学技術の研究・陶磁器の試作を行うと同時に、各種の依頼試験に応じ、欧州の器械による製造法などを直接陶磁関係者に指導・育成する官立の機関となる。このような試験所の設立に貢献した初代伊東陶山は、参考品として古陶磁器を蒐集していた。伝記によれば、1919（大正 8）年、時の東宮殿下御成年に際し、奉祝記念として京都・奈良の皇室博物館へ蒐集した古陶磁器のうち約 80 点を献納に及び、宮内省から三ッ組木盃を下賜されたとする⁽⁷⁾。現在、京都国立博物館には、伊東陶山寄贈の作品が 36 点所蔵される。（〔表 1〕参照）蒐集された作品は、幕末期の二代高橋道八（仁阿弥道八）の作品が最も多く、次に文人としても著名であった青木木米の作品や古清水を中心とした京焼と、出雲焼や相馬焼など日本各窯の茶碗や茶入である。小品中心ではあるが、初代伊東陶山が京焼のみならず様々な地域の作品を蒐集し、参考としていたことが想像される。自ら古陶磁研究に熱心だった陶山にとって、そして当時の京焼界にとって、京都市陶磁器試験所は希望の光であった。

【資料 4】 大日本窯業協會雑誌 19 号 明治 27 年 3 月

「陶磁器製造試験所ノ設立ヲ希望ス

工学博士 中澤岩太

（前略）我製品ハ或ハ退歩ノ感ナキヲ得ス（中略）而シテ此試験所ヲ組織スルニハ学理ニ通曉スルモノト技藝ニ堪能ナル者ト共ニ同心協力シ尚ホ之カ目的ヲ達センガ為メニ職工ノ徒弟ヲ養成シテ試験所ノ研究シタル良策ヲ各窯業者ニ伝播スルノ方法ヲ施行スルヲ要スナリ」

京都帝国大学理工科大学の教授であった工学博士中澤岩太の文章からも、単に製陶技術の高さを引き上げるといった目的の達成にとどまらず、高い芸術性をもった陶磁器制作を志す陶磁器試験場の設立は、衰退しつつあった京焼界においては急務であったことがわかる。作り手側と学者双方の熱望により、1896（明治 29）年陶磁器試験所が設立される。現存する参考品には欧米の陶磁器が非常に多く、中国や朝鮮の陶磁器、そして伝統的な京焼作品がみられる⁽⁸⁾。試験場では、原料土や、釉薬の研究に力を入れていたことが参考品からわかる。特に中国古陶磁器の研究においては優れた研究が行われ、大きな成果を生み出した。初代所長の藤江永孝は、農商務省実業練習生としてドイツ、オーストリアで最新の製造技術を学び、その他にも中国の窯業を視察するなど、日本に欧米や中国の技術を持ち帰った。その後 1903（明治 36）年には、日本初の辰砂釉焼成に成功し、青磁では宋代の龍泉窯の天龍寺青磁・砧青磁、鉄釉では宋・元代の玳皮盞天目などの研究が行われた。この中国の古典釉薬研究に関しては、数万種に上る釉薬実験が行われ、大正時代には河井寛次郎や浜田庄司が技手として活躍し、その成果を発表している。1920（大正 9）年に当時の京都市立陶磁器試験場によって編集された行績概要によると、

【資料 5】 1920（大正 9）年 京都市立陶磁器試験場行績概要⁽⁹⁾

（一）原料ノ調査、并ニ其應用ノ研究ニ勉メタル結果、従来ニ比シ大ニ変化ヲ来シ（中略）製品ノ品質

著シク佳良トナレリ

(一)磁器原料、(二)栗田焼原料、(三)耐火材料、(四)釉薬原料

(二)新製品ノ実現

新原料應用ノ結果特殊素地ノ製品ヲ出シ有力ナル商品トナリタルモノヲ列举スレバ

(一)特別高圧用電気用碍子、耐酸耐アルカリ用化学用磁器、無窯栗田焼素地（半磁器トシテ一般ニ賞用セラル、マヂョリカ焼、及硬質陶器ノ如キ其ノ顕著ナル一例ナルベシ）

(二)又釉薬トシテハ普通磁器并ニ栗田焼用、石灰釉、各種結晶釉、辰砂釉、青磁釉、マツト釉、其ノ他各種窯変釉ノ従来、曾テ見ザルモノ数十種

(三)顔料ノ如キ釉上、釉下ヲ問ハズ所要ノ全般ニ亘リ具須ノ如キモ或ル特殊ノモノヲ除ク外ハ殆ント本場ノ試験ニ成ルマイセン具須ヲ用フ

(三)機械ノ應用

(四)窯ノ改良

(五)熱度計ノ製法

(六)参考品ノ陳列

當場ノ創意ニナレル試験成績品ハ之ヲ公表セルノミナラス内地ハ勿論廣ク海外産各種最新式ノ製品ヲ蒐集スルヲ怠ラズ隨時之ヲ縦覧セシメ陶業者ノ眼界ヲ廣クセシメ之ニ依リ益スル処僅少ナラザルモノアリ

(七)當業者トノ關係

元来本場ノ業務ハ其性質上孤立スルヲ許サズ陶業者ト相提携シテ始メテ有終ノ美ヲ期待シ得ルモノナレバ懇切ヲ以テ陶業者ニ接シ依頼試験ニ、質疑ニ、ソノ他總テ手易簡單ヲ旨トシ往々見ルガ如キ複雑ナル手續ヲ經ズ試験料ノ如キモ無料ヲ以テ之ニ應ジタリ之ヲ以テ當初ハ教ヲ乞フモノ僅少ナリシガ漸時其ノ数ヲ増近年殆ト出入セザル者ナキニ至リ兩者ノ關係ハ円満ニシテ能ク信頼スルノ状、他ニ見サル処ナリ…（後略）

特筆すべきは、(六)参考品ノ陳列と(七)當業者トノ關係である。試験場での成果、または国内外産の製品を実見できる場として、京焼をはじめ中国や欧米の陶磁器が参考品として蒐集され、参考館に展示された。そして陶業者とより密接な関係を保つことが記され、このような環境の上に近代の京焼が発展を遂げたことを想像させる。この参考品として幅広く国内外の古陶磁を蒐集することが、近代京都における古陶磁研究の柱の一つであった。そして、この参考品のなかで、海外の作品は中澤をはじめとする研究者が中心に、京焼作品は初代伊東陶山のような作り手である製陶家を中心に蒐集が行われていたのではないかと想像される。

試験場が見本のために蒐集した参考品のコレクションは、現在、京都市産業総合技術研究所工業技術センターと愛知県陶磁資料館に所蔵される。かつて産業総合技術研究所に残る陶磁器試験場時代の蒐集品（参考品、試験品を含む）は2,000点を越えた⁽¹⁰⁾とされ、そのうち、質の良いものや大型の作品が愛知県陶磁資料館に託され、小品を中心として約100点あまりが京都市産業総合技術研究所工業技術セン

ターに所蔵されている。〔表 2〕 参照）本論文では、京都市産業総合技術研究所工業技術センターに所蔵される作品のみをとりあげた。

作り手側が参考作品として蒐集したコレクションのうち、このような形で現存しているものは少なく、貴重なコレクションである。陶磁器試験場の参考品は初代伊東陶山が密接に関係すると考えられることから、今後より詳細な調査を進めたい。また、他の京都の製陶家同様、初代伊東陶山も〔参考資料 2〕のように万国博覧会等国内外の博覧会に作品を出品している。1900（明治 33）年のパリ万国博覧会においては「陶磁器花瓶其他」の出品で銀牌を受賞した。この博覧会では、宮川香山が大賞を受賞、錦光山宗兵衛が金牌、清風与平が伊東陶山と同じく銀牌を受賞した。しかし、その作品が展覧会等で紹介されることは未だ少ない。

京都においては、その他京都高等工芸学校（現在の京都工業繊維大学）に、初代宮永東山（1868～1941）から一括購入した参考作品のコレクションが存在する。京都高等工芸学校も、陶磁器試験場とほぼ同時期に設立された学校である。当時、もう一つの急務としてあげられたのが、意匠図案の改良だった。1900（明治 33）年のパリ万博において、日本陶磁が装飾過剰と酷評されたことにより、1902（明治 35）年に、中澤岩太と浅井忠を中心に京都高等工芸学校（現在の京都工業繊維大学）が設立される。この背景には、陶磁器試験所の初代所長である藤江永孝、京都高等工芸学校設立の準備をしていた中澤岩太とともに、アール・ヌーヴォーに席卷された 1900 年のパリ万国博覧会へ足を運び、大きな衝撃を受けたことが大きく影響した。彼らが研究・教育用の参考資料として蒐集に努めた欧米の陶磁器は、陶磁器試験所の流れを汲む産業技術総合研究所や、京都高等工芸学校の後身である京都工芸繊維大学に、今も多数現存する。これらは当時万国博覧会で流行したもの、意匠図案、器形、釉薬などを研究するために購入された陶磁器作品である。

その中に、初代宮永東山が研究のため蒐集していた古陶磁のコレクションが存在する。〔表 3〕 参照）当時の京都高等工芸学校（現、京都工芸繊維大）が東山から 106 点の陶磁器を購入している。初代宮永東山は、1897（明治 30）年パリ万国博覧会臨時事務局に勤務し、1899（明治 32）年渡仏した折、七代錦光山宗兵衛と知り合い、帰国後、錦光山宗兵衛の工房で美術顧問として働き、その後中澤岩太が代表を務めた「遊陶園」の設立に参加した陶工である。

伊東陶山よりも 20 年ほど後の世代の人物であるが、作品件数がある程度まとまっていることから蒐集品の傾向を分析しやすいため、参照したい。全体の 27 パーセントを中国陶磁が占め、その中でも色絵や染付作品が最も多い。次いで京焼が 10 パーセントとなり、伊東陶山のコレクション同様、幕末期の二代高橋道八（仁阿弥道八）や初代清風与平等の京焼作品が中心である。その他 10 パーセントを占める有田地域の作品は、中国陶磁写しから鍋島、柿右衛門など多岐にわたる。その蒐集の仕方や蒐集品の比較については今後調査を行っていきたい。

以上のように、初代伊東陶山をはじめ明治時代に活躍した京焼の製陶家は、自らの学習のため、新たな作品の創造のため、そして京焼の技術や意匠の発展の参考として、熱心に古陶磁を蒐集していたことがわかる。

3. おわりに

本論文では、近代の京焼の陶芸技術習得において、古典学習が重要視されていたことを製陶家の蒐集品から述べた。しかし、陶磁器試験場での初代伊東陶山の活動やその作品に関しては紹介されることは少なく、今後調査を進めたい。当時の窯業界における中心的な定期刊行物であった『大日本窯業協会雑誌』には、陶磁器試験場設立の頃に亡くなった四代高橋道八の功績を称える文章が掲載された。そこには、「能ク中外ノ古器に模シテ巧妙真ニ迫リ、思フ磁料ノ用法ヲ凝ラシテ、創新独特シ、設色造形務メテ陳腐ヲ去リ、筆描窯焼精熟ヲ極ル（後略）」⁽¹¹⁾と評され、当時の評価が古器の模倣に巧妙であったこと、技術を工夫し優れた作品を製作したと紹介される。また「最モ得意ナルハ彫刻青華応用ノ器物ニアリ」と締めくくられ、第2章で紹介した先代の二代高橋道八（仁阿弥道八）評価と同様の評価であることがわかる。第1章において、特に明治時代の陶磁器は他の時代に比べて評価の低いことを挙げ、その原因を、産業的・工業的な生産体系の中で製作されてきた職人技という見方によるのではないかと述べた。しかし、明治時代の京焼は、全てが産業化されたわけではなく、江戸時代から続く京焼の伝統を後世に伝承しつつ、原料土の開発や、数万種に及ぶ釉薬の研究、窯の改良等の新たな技術の上に、京焼とは何か、を模索し打ち出し続けた製陶家たちの研究と情熱の結晶ともいえる作品が多く製作された、と考えられるのではないだろうか。このことは、京焼のみではなく、他の地域にもあてはまるだろう。しかし、その作品やコレクションは未だ亡失されやすい憂いがあるため、今後もこのような形で紹介していきたいと思う。

付 記

末筆ながら、調査研究にあたりご指導ご協力を賜りました、京都国立博物館の尾野善裕氏、京都市産業技術研究所・工業技術センター陶磁器チームの横山直範氏、愛知県陶磁資料館の佐藤一信氏、学習院大学の荒川正明教授、同大学院の堀真子氏に深く感謝申し上げます。

《注》

- (1) 佐藤 道信「帝室技芸員と帝国美術院会員」『三の丸尚蔵館年報・紀要（12）』2005年 宮内庁 / 宮内庁三の丸尚蔵館 編参照。
- (2) 万国博覧会については、『2005年日本国際博覧会開催記念展 世紀の祭典万国博覧会の美術 パリ・ウィーン・シカゴ万博に見る東西の名品』2004年 東京国立博物館・大阪市立美術館・名古屋市博物館巡回展図録 にて概要がわかる。
- (3) 本論文での引用文や人名等の旧字・旧仮名使いは、適宜新字・新仮名使いに改めた。なお、資料等で引用した文や人名等の旧字・旧仮名使いは、適宜新字・新仮名使いに改めた。なおカタカナ表記はそのまま引用している。
- (4) 『海を渡った明治の美術 一再見！1893年シカゴ・コロンブス世界博覧会』1997年 東京国立博物館に詳しい。
- (5) 『初代伊東陶山小伝』二代伊東陶山 1932年参照。1846（弘化3）年当時の山城国愛宕郡栗田領に生れ、幼名は重次郎、のちに幸右衛門と改める。洋食器、装飾品などの輸出品を作り盛業を極め、1873（明治6）年以降宇治の朝日焼の復興、栗田焼の改良に尽力する。1883（明治16）年以降、アムステルダム・パリ・シカゴ万博でそれぞれ受賞。明治24年栗田焼の本焼釉料の発明に成功し焼付技法を完成させる。明治28年より、陶山を名乗る。

- (6) 鎌谷 親善「京都市陶磁器試験場-明治 29 年～大正 9 年-1-」『化学史研究』40 1987 年、同じく鎌谷 親善「京都市陶磁器試験場-明治 29 年～大正 9 年-2-」『化学史研究』41 1987 年を参照。
- (7) 「初代伊東陶山小伝」二代伊東陶山 1932 年 「古陶器の蒐集」項参照。
- (8) 植田哲哉「陶磁器試験所の果たした役割」化学史研究 Vol.28 2001 年を参照。
- (9) 京都市立陶磁器試験場／編『京都市立陶磁器試験場行績概要』1920 年、京都市工業試験場窯業技術研究室／編『京都市陶磁器試験所創設 100 周年記念誌』1997 年参照。
- (10) 愛知県陶磁資料館の佐藤氏の話によると、当時の陶磁器試験場は年間 1000 点以上、陶磁器を購入していたということである。
- (11) 『大日本窯業協會雑誌』19 号 明治 27 年 (1892) 3 月参照。

《参考文献》

『シリーズ・やきもの周辺Ⅰ のこす・伝える「お宝」考今昔』茨城県陶芸美術館 2008 年
 『京焼 ― みやこの意匠と技 ―』2006 年 京都国立博物館
 『清水六兵衛歴代展 京の陶芸・伝統と革新』千葉市美術館 2004 年
 『京都高等工芸学校』美術研究会編『京都工芸繊維大学所蔵名品集 1902 年の好奇心』光村推古書院 2003 年
 『海を渡った明治の美術 ― 再見！1893 年シカゴ・コロンブス世界博覧会』1997 年 東京国立博物館
 中ノ堂一信『京都窯芸史』淡交社 1984 年
 藤岡幸二『京焼百年の歩み』京都陶磁器協会 1962 年
 『初代伊東陶山小伝』二代伊東陶山 1932 年
 京都博覧会協会編『京都博覧会沿革誌』京都博覧会協会 1903 年

〔論文〕

佐藤道信「帝室技芸員と帝国美術院会員」『三の丸尚蔵館年報・紀要(12)』宮内庁／宮内庁三の丸尚蔵館 編 2005 年
 岡本隆志「三代清風與平について(二)」『三の丸尚蔵館年報・紀要(12)』宮内庁／宮内庁三の丸尚蔵館 編 2005 年
 佐藤一信「近代窯業の父 ゴットフリート・ワグネル」愛知県陶磁資料館学芸課編『近代窯業の父ゴットフリート・ワグネルと万国博覧会』愛知県陶磁資料館 2004 年
 岡本隆志「三代清風與平について(二)」『三の丸尚蔵館年報・紀要(11)』宮内庁／宮内庁三の丸尚蔵館 編 2004 年
 岡本隆志「近代の京焼にみる中国陶磁撰取の諸相」『三の丸尚蔵館年報・紀要(10)』宮内庁 / 宮内庁三の丸尚蔵館 編 2003 年
 竹内順一「日本陶磁研究史序説(14)京焼は人から」『陶説』587 日本陶磁協会 2002 年
 竹内順一「日本陶磁研究史序説(7) ― 外からの視点 ―」『陶説』576 日本陶磁協会 2001 年
 植田哲哉「陶磁器試験所の果たした役割」『化学史研究』Vol. 28 2001 年
 大熊敏之「一九〇〇年パリ万国博覧会と日本の近代陶磁」愛知県陶磁資料館『万国博覧会と近代陶芸の黎明』愛知県陶磁資料館 2000 年
 服部文孝「近代陶磁研究の概要」『近代陶磁』第 1 号 近代国際陶磁研究会 2000 年
 仲野泰裕「近代陶磁研究の視点」『近代陶磁』第 1 号 近代国際陶磁研究会 2000 年
 荒川正明「陶芸における世紀末様式―19 世紀の西洋と日本の美術陶磁の交流」出光美術館『出光美術館研究紀要 第一号』出光美術館 1999 年
 鎌谷親善「京都市陶磁器試験場 ― 明治 29 年～大正 9 年-2-」『化学史研究』41 1987 年
 鎌谷親善「京都市陶磁器試験場 ― 明治 29 年～大正 9 年-1-」『化学史研究』40 1987 年

〔報告書〕

京都市工業試験場窯業技術研究室／編『京都市陶磁器試験所創設 100 周年記念誌』1997 年
 京都市立陶磁器試験場／編『京都市立陶磁器試験場行績概要』1920 年

〔定期刊行物〕

窯業協会『大日本窯業協会雑誌』大日本窯業協会事務所 1892 年～1900 年

表 1 初代伊東陶山寄贈作品（京都国立博物館所蔵）

* 京都国立博物館での調査と、京都国立博物館収蔵品データベースより

		作 品 名 称	作 者	時 代	素材・技法等	備考（印銘など）
図版 3	1	白磁鳳凰浮文茶鉢（急須）	青木木米	江戸時代・19 c	磁製提梁付	蓋裏に「木米」の小判印あり
図版 4	2	銕釉金彩亀置物	仁阿弥道八（二代高橋道八）	江戸時代・19 c	陶製亀形置物	腹部に「道八」の刻銘あり
図版 5	3	三鳥写平鉢	仁阿弥道八（二代高橋道八）	江戸時代・19 c	陶製平茶碗形	高台内に「仁阿弥」の印あり
	4	染付山水丸紋鉢 鹿背山	井上松兵衛	江戸時代・19 c	陶製平鉢形	高台内に「大明成化年製」染付銘
	5	銕絵染付草花文鉢	岩倉山	江戸時代・19 c	陶 製	底に「岩倉山」印あり
	6	染付茶詩茗碗	高橋道八（三代）	江戸～明治時代・19 c	磁 製	高台内に「道八」染付銘あり、5 個
	7	祥瑞写茶碗	清風与兵衛	明治時代・19 c	磁製水鉢形	高台内に「於明浦清風作」染付銘あり
図版 6	8	祥瑞写鉢（箱書のみ）	真清水蔵六	明治時代・19 c	磁製水鉢形	底に「真清水蔵六製」染付銘あり
	9	赤楽筒茶碗	高橋道八（三代）	江戸～明治時代・19 c	陶製筒茶碗形	高台脇に「道八」刻銘あり
	10	銕絵竹文筒茶碗 出雲楽山	倉崎権兵衛	江戸時代・18～19 c	陶 製	
	11	信楽写肩衝茶入 銘皆奈瀬	清水六兵衛（初代）	江戸時代・18 c	陶製肩衝茶入	底に「六兵衛」刻銘あり
	12	褐釉肩衝茶入 高取		江戸時代・18 c	陶製肩衝茶入	
	13	色絵若松文茶碗 栗田	栗 田	江戸時代・19 c	陶製碗形	高台内に「栗田」印あり
	14	染付雲龍文茶碗 因久山	艾 山	江戸時代・19 c	陶 製	底に「因久山」及び「艾山」方印あり
	15	褐釉茶碗 志戸呂		江戸時代・19 c	陶 製	高台内に「志戸呂」印あり
	16	染付宝文筒茶碗 尾戸		江戸時代・18～19 c	陶 製	
	17	褐釉割蓋茶入 源内		江戸時代・19 c	陶 製	
	18	御本写茶碗 出雲		江戸時代・18～19 c	陶 製	
	19	白濁釉茶碗 萩		江戸時代・19 c	陶 製	
	20	色絵松竹梅注連縄宝尽文茶碗	錦光山	江戸時代・19 c	陶 製	高台内に「錦光山」印あり
	21	祥瑞写茶碗	水越与三兵衛	江戸時代・19 c	磁 製	底に「與三造」銘あり
	22	白釉金宝珠文茶碗 赤膚山		江戸時代・19 c	陶 製	高台脇に「赤膚山」及び「木白」印あり
	23	黒楽白絵富士文茶碗 赤膚山	木 白	江戸時代・19 c	陶 製	底に「赤膚山」及び「木白」印あり
	24	染付花唐草文水指 元賛		江戸時代・18～19 c	陶 製	
	25	御本立鶴文茶碗	理 平	江戸時代・18～19 c	陶 製	
	26	黒釉花瓶	珉 平	明治時代・19～20 c	陶 製	
	27	褐釉芋頭水指	清水六兵衛（四代）	明治時代・19～20 c	陶 製	底に六角「清」印あり
	28	阿蘭陀染付写唐子文鉢 錦光山	錦光山	明治時代・19～20 c	陶 製	底に「錦光山」印あり
	29	白濁釉茶碗 湊		江戸時代・19 c	陶 製	高台脇に「湊焼」印あり
	30	御本筒茶碗 志賀		江戸時代・19 c	陶 製	「志賀」の刻銘 「シカ」書銘あり
	31	灰釉茶碗 伊賀		江戸時代・19 c	陶 製	高台脇に「いか」刻銘あり
	32	雲鶴象嵌文茶碗 柳原		江戸時代・19 c	陶 製	
	33	白磁染付馬貼付文茶碗 相馬		江戸時代・19 c	磁 製	
	34	黒褐釉筒茶碗 瀬戸		江戸時代・18～19 c	陶 製	高台内に「瀬戸助」印銘あり
	35	黒釉茶碗 栗田		江戸時代・19 c	陶 製	
	36	染付葵紋茶碗 栗田		江戸時代・19 c	陶 製	

表 2 旧京都市陶磁器試験場所蔵 日本陶磁器編

(現 京都市産業技術研究所・工業技術センター所蔵)

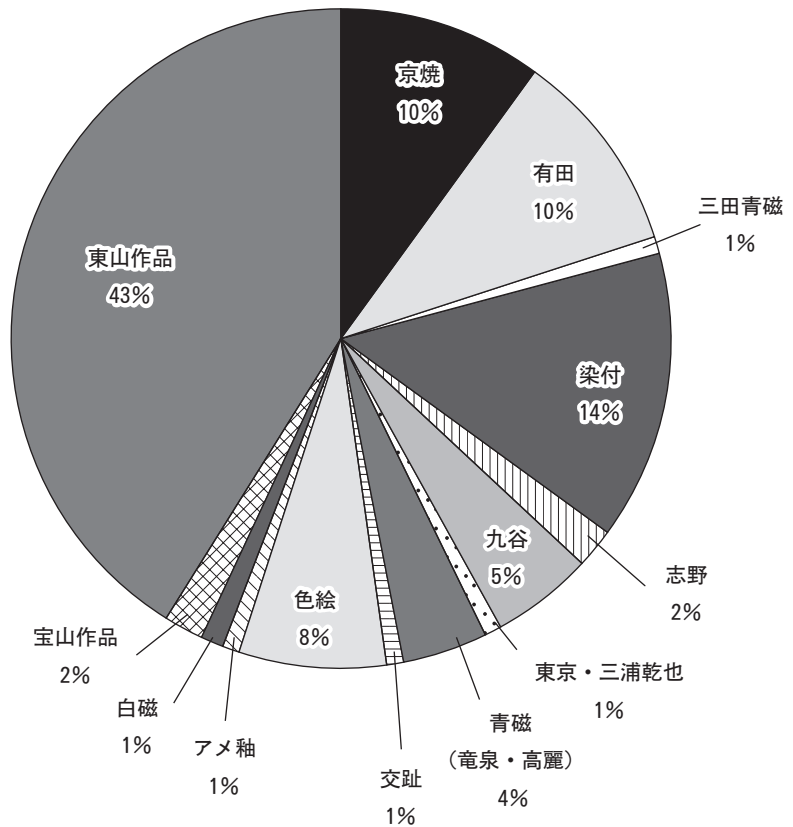
図版番号	作 品 名	国／作者	時 代	印 銘	調 査 内 容
図版 7	色絵赤壁賦文急須	仁阿弥道八(二代)	江戸・文政年間	取っ手の下「道八」印	「文政年製」と年記あり。
図版 8	色絵呉須赤絵蓋茶碗	永楽保全か	江戸時代・19c	身の底部に「河濱支流」刻印	
	青磁三足香炉	二代真清水蔵六	明治時代・19c	底に「蔵六」印	「明治の京焼」京都府立総合資料館 1979 年出品
	青磁菱形香炉	錦光山宗兵衛	明治時代・19c	胴底部に六角形内に「錦」刻印	「明治の京焼」京都府立総合資料館 1979 年出品
	青磁獅子象嵌花瓶	初代諏訪蘇山	明治時代・19c	底部に「蘇山」丸杵印	「明治の京焼」京都府立総合資料館 1979 年出品
図版 9	色絵金彩花鳥図高杯	錦光山宗兵衛/栗田口	明治時代・19c	脚内に「錦光山」刻印、脚部に「日本/京都/錦光山造」金彩銘	手づくねの指跡が全体に残る。「明治の京焼」京都府立総合資料館 1979 年出品
	色絵紅葉文鉢	高橋道八	江戸時代・19c	底部に「道八」刻印	
	栗田焼金彩色絵年中行事皿	錦光山宗兵衛	明治時代・19c	高台内に「錦光山製」印	「明治の京焼」京都府立総合資料館 1979 年出品
図版 10	赤絵龍文蓋物	奥田颯川	江戸時代・19c		
	古清水色絵香炉		江戸時代・18～19c		
図版 11	色絵唐人物文急須	尾形周平	江戸時代・19c	把手下部に「周平造」赤絵銘	図版 7 同様煎茶の泣訴して当時流行。初代尾形周平。
	仁清写梅図茶碗	真葛窯 宮川香山	明治時代・19c	高台内に「真葛」刻印	
図版 12	独楽香合	伊東陶山	明治時代・19c	底に「陶山」小判形印	
	交趾亀形香合	真清水蔵六	江戸～明治時代・19c		
	色絵野菜尽文皿	大川内 鍋島	江戸・元禄頃		
図版 13	乙女置物	初代伊東陶山	明治時代・19c		「明治の京焼」京都府立総合資料館 1979 年出品仁阿弥道八作品が源泉。

表3 京都工芸繊維大学美術工芸資料館 宮永東山コレクション

*「京都高等工芸学校」美術研究会編『京都工芸繊維大学所蔵名品集 1902年の好奇心』光村推古書院 2003年、収蔵品目録等参照

宮永東山コレクション

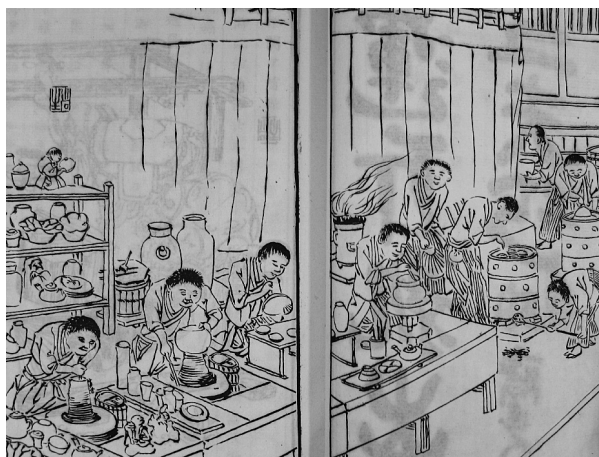
全体（作品点数）	106
京 焼	11
有 田	11
三田青磁	1
染 付	15
志 野	2
九 谷	5
東京・三浦乾也	1
青 磁 （竜泉・高麗）	4
交 趾	1
色絵・赤絵	8
アメ釉	1
白 磁	1
雲林院宝山	2
宮永東山	43



参考資料 *1・2ともに東京文化財研究所所蔵資料より

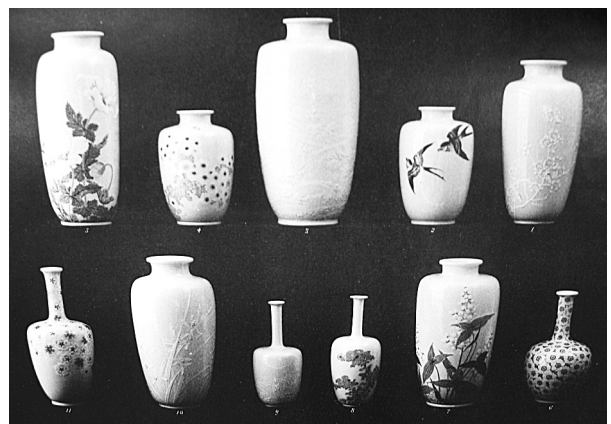
〔参考資料1〕 京都博覧会協会編『京都博覧会沿革誌』京都博覧会協会 1903年

1887（明治20）年『京都新古美術展覧会品目 上』陶磁器の項 高橋道八、清風与平、清水六兵衛、伊東陶山等による陶磁器制作実演風景の図



〔参考資料2〕『美術画報第二 臨時創刊 巴里万国博覧会出品組合制作品』1900（明治33年）

初代伊東陶山出品作品（16点のうち11点）



4. 菊花図花瓶 3. 波図花瓶 2. 飛燕図花瓶 1. 梅花図花瓶
8. 菊花図花瓶 7. 澤瀉図花瓶 6. 梅花文花瓶 5. 罌粟図花瓶
11. 罌粟文花瓶 10. 蘭図花瓶 9. 波図花瓶

近代京都の陶芸技術にみる古典へのまなざし



図版1 初代伊東陶山〔上絵雲錦鉢〕
岡野商會蔵 明治後期
〔「シリーズやきものの周辺Ⅰ
のこす・伝える・「お宝」考今昔」展
茨城県陶芸美術館 2008 図録より掲載〕



図版2 二代高橋道八（仁阿弥道八）〔色絵雲錦鉢〕
ボストン美術館（モースコレクション）19世紀

* 図版3～6：〔表1〕の図版番号と対応



図3 青木木米〔白磁鳳凰浮文急須〕



図4 二代高橋道八（仁阿弥道八）〔銹釉金彩亀置物〕



図5 二代高橋道八（仁阿弥道八）〔三島写平鉢〕

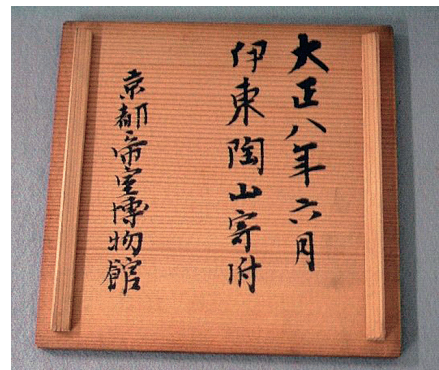


図6 初代伊東陶山寄贈作品 箱書

*図版7～13：[表2] の図版番号と対応



図7 仁阿弥道八 [色絵赤壁賦文急須]



図8 永楽保全か [色絵呉須赤絵蓋茶碗]



図9 錦光山宗兵衛 [色絵金彩花鳥図高杯]



図10 奥田穎川 [赤絵龍文蓋物]



図11 初代尾形周平 [色絵唐人物文急須]



図12 初代伊東陶山 [独楽香合]



図13 初代伊東陶山 [乙女置物]

[Summary]

Classical Ceramic Works Studied by Ceramic Artists of
Modern KyotoWhat Kyoto Ware Artists Sought in the Midst of
Innovation and Revival

MORISHITA Aiko

Today in Japan there is a system for designating intangible “skills.” Traditional skills and techniques designated as intangible cultural properties, particularly in the field of ceramics, vary depending on the time during which they were developed, the place of manufacture, raw materials, manufacturing processes and the existence of people who inherit these skills and techniques.

This year, the author investigated classical ceramic works that ceramic artists of Kyoto collected in the Meiji period as well as documents regarding Kyoto ware which were published from the mid- to late Meiji periods. As a result it was found that many Kyoto ware were exhibited at World Expositions and that this resulted in a change in the manufacture of ceramics from that for domestic use to that for export. It also brought about significant changes among ceramic artists and others engaged in the ceramic industry. That is why ceramic artists in Kyoto started to study designs and to develop glazing techniques. In this paper, the author introduces the study of classic works of Kyoto ware in order to see what the ceramic artists learned and what ingenuity they brought into their works.

Research and Reports on Intangible Cultural Heritage
Number 3
2009

Publisher:

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo
13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8713, Japan

無形文化遺産研究報告 第3号

平成21年3月27日印刷

平成21年3月31日発行

編集 独立行政法人 国立文化財機構
東京文化財研究所
『無形文化遺産研究報告』編集委員会

編集委員 無形文化遺産部 部長 宮田 繁幸
無形文化財研究室長 高桑 いづみ
音声・映像記録研究室長 飯島 満
共立女子大学家政学部教授 長崎 巖

発行 独立行政法人 国立文化財機構
東京文化財研究所

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43
電話 03 (3823) 2241

© 独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所 2009

National Research Institute for
Cultural Properties, Tokyo